

ハムレットの悩み：キャリア形成における実存的決断と意思決定

日置, 弘一郎

<https://doi.org/10.15017/4493021>

出版情報：経済學研究. 57 (3/4), pp.121-132, 1992-08-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

ハムレットの悩み

— キャリア形成における実存的決断と意思決定 —

日 置 弘 一 郎

本稿は福岡市市民局女性部の女性の家庭と職業に関する調査の理論的準備として書かれたものである。調査そのものは質問紙調査であり、本稿で述べるような実存的決断が果たして質問紙で調査できるかという点は必ずしも十分な検討を行っているわけではない。しかし、理論としてはこれまでの行動科学の範囲内では女性のキャリアを十分に説明できないという感触は非常に強く、一歩でも理論を進めるために本稿を用意した。したがって、調査の結果そのものは本稿の理論に拘束されるものではないが、調査の背景として本稿で述べる理論準備があったことを表明しておきたい。本稿の成立のきっかけとなった調査準備の討論の参加者を以下に記して感謝したい。福岡市市民局女性部、部長植木とみ子、永松幸子、アミカス（福岡市女性センター）淵上昌子、甲木京子、西日本リサーチセンター、吉田潔、阿比留撰、松原博美、九州大学大学院、小川真理、長谷川伸子

1. 存在への問いかけ

To be, or not to be. That is the question. ハムレットの悩みである。“be”を存在していること、生きていることと解釈すると、坪内逍遙以来の「生きるべきか、死ぬべきか。それが問題だ」という訳になる。しかし、“be”を存在そ

のものと考え、「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ（小田島雄志『咖啡店のシェイクスピア』1978晶文社）」とすることが可能である。演劇の流れからすると、突如ハムレットが生死を考え出すというわけではなさそう、この小田島訳の方が流れは理解しやすい。しかし、ここではこのような英語の解釈を問題としているわけではない。問題にしたいのはこのようなハムレットの悩みが意思決定論で解けるかという点である。

経験的には、ハムレットの悩みと意思決定論はかなりの違和感がある。意思決定論は複数の代替案の中から最適のものを選択するというプロセスであり、意思決定論における決定の構造は、基本的にあれかこれかの形をとる。複数の代替案の中から、意思決定者にとってもっとも高い効用をもたらす代替案を選択する過程として意思決定は描かれる。一般的には、意思決定の様式はあれかこれかだけではない。代替案は一つしかないが、それを受け入れるか否かについて悩んだり、回避するためにどのような方策が可能であるかを検討している状況に意思決定の時間の大半を費やすということがむしろ普通であるように思える。ハムレットの悩みはあれかこれかという明確な代替案を選択しかねている悩みではない。ハムレットが置かれた状況——父の死に疑念を抱きつつそれに対してなん

らかの行動を起こすか否かを悩んでいる——を自分で容認できるか否か判定しかねているという状態である。

もちろん、このような決定も形式的にはあれかこれかの選択として書き換えることができる。ハムレットにとって、このままデンマーク王子でいることの効用と、なんらかの行動を行うことの効用を比較して、その得失を考え、効用を最大にするように選択を行うという意思決定としてハムレット問題を解釈することは形式上は可能である。このために代替案の選択プロセスとしての意思決定が一般性を持っていると考え、理論化がなされている。しかし、現実にはハムレットのような悩みは明確な形での代替案選択過程と意識されているとは思えない。現実の場面ではハムレットの悩みのような明確な意思決定基準を持たず、構造化もされていない問題が非常に多く現れ、意思決定論が有効であるようなケースは少ない。

形式的には意思決定論の枠組みで理解することはできても、その形式とは異なる実質を持っているといつてよいだろう。その実質をどのように理解すればよいか。ハムレットの悩みとはどのような問題だろうか。この問題はハムレットが現在の状況、あるいは自分の存在についての判断を行う意思決定であり、通常の意味決定論の構造とはかなり異なっている。つまり、自分自身の存在がどのようなものであるかについての決定は、目的—手段という体系が成立しないという点で意思決定の枠組みとは異なり、目的そのものを問題としつつ意思決定の対象そのものが変化する、ハムレットの場合であれば自分の存在そのものを決定することによって自分が何を決定しなければならないかがドリフト（漂流）していくと考えられる。

ハムレットの悩みは存在そのもののあり方についての悩みであり、明確な目的を設定すること、あるいは価値の序列が付けられることが前提となっている意思決定論の枠組みでは処理できない。意思決定の枠組みからは、代替案に対して一意に効用が付与されなければ代替案が評価できず、意思決定論は成立しない。価値そのものや価値を生み出す自己の存在のあり方について選択しなければならない状況では、特定の価値を選択することでどのような効用が生み出されるかという点について一意的な評価は不可能であり、特定の価値を選択したという条件を付与して、その価値を選択した場合の効用を評価することになる。複数の価値選択を意思決定論の枠組みで評価することはできない。意思決定論の用語に即していえば、価値そのものを選択することが意思決定論の枠組みで可能であるかの問題になる。複数の価値の代替案が存在し、それを選択するためには代替案についての効用などの評価関数が必要となる。ところが評価関数を成立させるためにはなんらかの価値前提が必要となり、その価値そのものが選択される必要があるために決定することはできない。“to be”という代替案と“not to be”という代替案の選択としてハムレットの悩みを解決することはできない。

ハムレットの悩みを実存的決断と呼ぶことができる。存在そのもののあり方を問題とし、どのような存在であることを選び取るかについての決断が行われる。このような決断は意思決定の枠組みではとらえられない。近代社会では意思決定論を必要としたことに示されているように、効率や目的達成のためには実存的決断を回避して、目的が明確になっていると考えることがより高い生産性につながる。このために、近

代社会はしばしば実存的決断を忌避したり無視してきた傾向が指摘できる。ハムレットの悩みは近代社会では自分で自分の将来を決定できない優柔不断さとして受け取られ、ハムレット型人格として青年期の役割モラトリアムを脱却できない未発達な状況として理解されてきたという経緯があり、近代的理性はシェイクスピア演劇の実存の不安というものをまったくすり替えて理解している（マック「ハムレットの世界」ブルックス編「悲劇の誕生」1968至誠堂所収）。実存の不安にさらされているという状況と、自分の置かれている状況を理解できず、あるいは自分が置かれた状況を改変するために積極的に行動することを回避するという状態では全く意味が異なっている。

われわれはハムレットの悩みを近代社会のなかでは回避することができる。実存への根本的な問いかけを行わなくとも日常生活を維持し、社会に適応することは可能である。しばしば実存的問いかけは産業社会のなかで大状況の中に埋没せざるを得ないことを確認するだけに留まるために、それを投げかけることの無意味さが指摘される。大状況としての産業社会を個人のレベルで改変することはほとんど不可能であるために、産業社会のなかで個人が与えられた役割を自明のものとし、それへの問いかけを行うことがなくなる。このような状況を自覚すること自体が希薄となり、疎外が疎外感として処理されることになる。

この構造、実存への根本的問いかけが希薄になり、産業社会の中で当たり前の日常世界としてしか世界を感知できなくなる状況が確定している中で、男女のキャリア意識が分化する。すなわち、日本の状態を考えるならば、産業社会の中に埋没して実存的決断の機会を剝奪されて

いるのは男性であり、女性は意外に実存的決断を行う機会を持っている。男性中心社会が男性のジェンダーを固定することで中心化が行われることから、男性はキャリアコースの選択に当たって、性役割に即したキャリアを当然としている。つまり、進学・就職・結婚などは当然キャリアの一段階として経験すべきであると考えられ、これらのイベントが遂行できないのは能力や意思の欠如によるものであるとされる。

女性の場合には、これらのキャリア上のイベント（進学・就職・結婚・出産・育児・再就職など）はすべてを完備する必要はなく、それぞれのイベントの実行にはなんらかの決断を要請されているとよい。結婚が当然であると考えただけではなく、結婚と就職などが結合することによって、これらのイベントはなんらかの自己の存在が変化することの容認を含む決断を要請する。現在では出産や育児もこの種の選択可能なイベントになりつつあり、子供の教育も受験戦争への参入という意味では子供と自分の存在のあり方を問い直す必要に迫られる。“to be or not to be”「このままでいいのか、いけないのか。」それが問題であるのだ。

女性のキャリア形成が主体性を欠いたものであるという指摘は、日本の前近代の価値意識への評価に明確にみられる。確かに第二次世界大戦前の女性は、三従として親・夫・子供に従属することを美德とされ、自ら主体的に自分の人生を決定することを放棄することが求められていた。現在ですらこのような価値意識はまったく存在しなくなったわけではなく、女性の性役割を従属的なものに限定するという意識は強い。

しかし、他方でこのような女性が自らの存在のあり方を自分で決定できないと考えることは、存在の条件次第でどのような可能性をも追求で

きることを意味している。男性の場合には、キャリア形成は自分の能力や資質を最大限に発揮することが当然であり、そのためのさまざまなキャリアコースが予定されているとしても、基本的には職業生活での自己実現を行うことが当然とされている。その意味では、男性は職業やキャリアの中に封鎖されることが基本であり、その中での選択肢を選択するプロセスとしてキャリア形成が行われる。この意味では男性のキャリアは単線的で、目的＝手段の体系が明確に設定されているといつてよい。

これに対して女性の場合には、イベントがそれぞれ複合しており、どのイベントを優先するかについてはその状況に応じて優先順位が決定されることが多い。例えば、一般的な価値意識として職業生活の優先を考えていたとしても、結婚相手が具体化する中でそれまでの価値意識を継続できるか否かは明確ではなく、相手が特定されてはじめて明確な判断が可能になる。つまり、相手が目の前にあらわなければ、職業を取るか結婚を取るかは決定できない。その意味では状況に適應して価値意識が決定されるという主体性の欠落した判断がなされていると考えることもできる。しかし、このような状況に入ってしまったからその中で判断するという態度もまた、ある意味で主体性を確保しているといつてもよい。それは、状況を受容するという決定が先行して、状況をそのまま受け入れることによって自己のアイデンティティにこだわらず自分を形成し、存在のあり方を決定することを意味している。実存的決断としては、投げ込まれた状況に対応した存在の様態を選択することは非常に主体性を帯びた行為である。同じ状態を状況に流されているという批判が可能であるが、外部からの観察者が主体的行為であるか否

かの判定はほとんど不可能であろう。

問題は、男性が複数のキャリアを選択する可能性が開かれており、かつ生活や家庭にとられない自由な選択が可能であるという事実に基づいて、男性の方が主体性を発揮する機会に富んでいると考えられている視点を受け入れてよいか、再検討する必要があると思われる点にある。主体性を放棄することが主体性の発現になりうるという事実は認めなければならない。自ら自由を放棄する自由は果たして自由なのだろうか。あるいはこのように自由を放棄した状態は不自由といつてよいのか。メタレベルでの自由や主体性については状況次第で一般的な判断はできない。状況に委ねてその中で自己の存在のあり方を選びとっていくという存在のあり方もまた主体的な生き方でありうる。逆に、男性の通常のキャリア形成は、就職し、結婚するというイベントそのものについての判断を放棄している場合が多く、自己の存在のあり方を選びとるという意味での決断を行わずに産業社会に参入しているという意味で主体性を持っていないといつてよい。

このようなメタレベルでの言明は、先前的意思決定前提そのものを選択するという実存的判断が意思決定論では扱えないという場合でも同様であるが、行動の次元では矛盾をきたすことがありうる。行動の次元としては矛盾しなくとも、自己言及的な言明を含むと論理的には矛盾を引き起こすという事例をさらに重ねるならば、アイデンティティもその可能性を持つ。例えば、三年に一度アイデンティティを根本的に変えるという行動様式を持っている場合に、この人間は果たして強固なアイデンティティを持っているといつてはいけないのだろうか。あるいは変節漢というアイデンティティは成立しないのか。

同様に企業文化論では革新につながる企業文化の想像を論じているが、変革促進型の企業文化が確立したという状況では企業文化そのものは変化するのかもしれないか。変化そのもののルールが含まれているような文化が確立したということとは文化が確立したことになるのか。

現在の日本でのサラリーマン男性の決断の構造は、このような意味でハムレットの悩みではなく、目的に向けて動機づけられた近代の産業戦士として、合理性の体系を完結する最適の代替案を探索するスマートな意思決定である。目的を達成するために最適の手段を選択するという意思決定者は、近代社会における男性の価値を体現しているかも知れない。つまり、近代社会における男性的とは、ハムレット的な悩みとは無関係な、産業社会に疑いを持たず、問題をあれかこれかの代替案の選択の形式に落とし、その中で合理的な判断を行うような意思決定者である。

日本の男性の状況からは、キャリア形成の過程における実存的問いかけを行うきっかけは果たして有るのだろうか。自分の置かれた立場を受け入れ、そのなかで目的を遂行するために最適の選択を連続するという状態では、自己の存在そのものを疑い、根本的に問い直すことは困難である。自らの存在を根本的に問い直すこと無く産業社会のなかで定年まで働き続けるならば、その結果は「濡れ落ち葉」である。濡れ落ち葉になるのは当然であるだろう。なぜなら、学生や職業人としての肩書きのなかで生きてきて、定年になってはじめて自分の存在と直面するという状況では、自己の意味をどのように持ち得るだろうか。定年になって、一人の個人としての自己の存在と直面した場合に、これまで自己の存在を厳しく問い直すことなく過ごして

きた人間が、自己の存在に自信を持つことは極めて困難だろう。

おそらく、日本の平均的な組織従業者（サラリーマン）が自己の存在の意味を問い直すきっかけは、離婚と転職に限定されるだろう。現状を捨てて新たな存在の意味を探求するきっかけとしては生活の基盤を根底的に変化させるような決定を行うことがきっかけとなる。逆に離婚や転職という相当に痛みを伴うような状況におかれぬ限りは日本の平均的なサラリーマンは自己の存在を疑うということにならない。この点では女性のキャリアと大きく異なっているといえてよい。女性であれば、結婚・出産・就職・再就職といったそれぞれの転機で生活の基盤をどのように設定するかを決断する必要があり、なんらかの真剣な存在についての問いかけを行う必要があるケースが多い。「このままでいいのか、いけないのか。」という疑問は、男性は離婚・転職をきっかけとしなければ発せられることはないが、女性の場合は職業への機会が限定されていることも含めて、この種の問いかけを行う機会は少なくない。

欧米ではどうか。理念としては欧米の産業社会についても同様に男性はキャリア形成における実存的問いかけを禁止されているように思われる。自己の実存的意味を問い直さなければならないような状況は、産業社会におけるアイデンティティクライシスであり、自己の置かれた状況に対して疑いを示すようでは社会人として成熟していないと判定される可能性は否定できない。muscle という価値が決断の能力を含んでいることは明らかで、決断ができない状況は男性としての資質にかけるとされかねない。果敢な決断が可能なりーダーが人の上に立つ人間であり、近代産業社会での理想像の一つを構成し

ている。近代産業社会では、自己の存在に悩み自分がどのような価値を信奉すべきかを思い悩んでいるようでは適応的な人格とはいえない。

男性中心社会が形成されるにともなう、目的を明確にした上で複数の代替案を評価し選択するという男性型の意味決定スタイルを自明とすることで、実存への真剣な問いかけは次第に忌避されるようになっていったと言えるだろう。さらにここで注意しなければならないのは、このような意思決定のスタイルが欧米における個人主義の概念とかなり共通性を持っている点である。濱口はS. ルークスの個人主義の主要属性についての理論をもとにして、個人主義の基本属性として、1. 自己中心主義、2. 自己依拠主義、3. 対人関係の手段視をあげている(濱口恵俊「日本人の連帯的自律性」『現代のエスプリ』no. 160「集団主義」至文堂所収1977)。

自己中心主義とは「自認的自我を自分のパーソナリティの中に確立し、その調整維持を図るとともにその有する潜在力が最大限発現されるように努めること」とされており、自由な意思決定の主体が確立され判断の基準となっていることを意味している。自己依拠主義とは、生活上の基盤を自己が確立し、生活上の欲求は自らの力で充足すべきであるという価値態度であり、他者に依存することなく生活できることを理想としている。対人関係の手段視は、自立した個人が関係を持つ場合に、関係自体が自らの存立にとって有用な手段として考え、関係そのものを持つことには価値を見いださないと態度である。

この自己中心主義は、D. リースマンが近代社会における人格類型として、伝統志向型、内部志向型、他者志向型という3類型を考え、自己の内部の価値意識に忠実であるような内部志向

型を民主主義を構成するための要件と考えていたことに対応している。つまり、近代の欧米での理想の人格類型は、自己の内部に明確な価値基準を持ち、他者にその判断を委ねてはならないとされている。この視点からすると、日本人のような他者の存在が判断の基準になるような人格は、個人としての人格が未成熟であるという評価を下されることになる。日本人の人間観としては、個人主義とは対極の、自己中心主義に対する相互信頼主義、自己依拠主義に対する相互依存主義、対人関係の手段視に対しては対人関係の本質視が対応し、これらが個人主義とは異質な間人主義を構成するとされる。間人主義は東アジアを中心とする地域における対人関係を説明する原理として有効であるので、欧米の個人主義が一般的で、間人主義が特殊というわけではない。むしろ、個人主義は世界全体からすると特異な価値意識であるように思われる。

さらに、個人主義の特性は状況一貫性という態度をもたらす。状況一貫的な判断とは、どのような状況においても判断が一貫性を持っていることを要請するもので、社会学で普遍主義的価値意識と呼ばれている特性である。これと対極にあるのが個別主義の価値意識で、判断の対象がどのようなものであるかによって判断の基準や適用される価値が異なる。これはしばしば欧米での状況一貫性からはダブルスタンダードであると非難されるが、状況に応じて臨機応変に適用する原則を柔軟に使い分けることによって、対人関係を損なわないようにする。要するにすべての他者に自己と同じ基準を要請するのが自己中心的(ego-centric)な態度であり、すべての状況・場面・相手を通して同一の基準を要請する。これに対して状況即応性は、状況に応じて基準が使い分けられる。

両者のいずれが望ましいかについての議論は不適當であろうが、いくつかの点は指摘できる。まず、近代以前の身分社会においては社会成員すべてに共通する判断基準が設定されることはなかった。このためにすべての社会成員を等資格で扱うことは、身分による社会評価を排除し、能力や業績に応じた評価を余儀なくさせるという意味で社会の公正を確保するために大きな役割を果たした。また、産業社会における官僚制の要件が能力や資質による人事評価であることも、前近代の状況に対応して近代が構想されたことを示している。このために状況一貫性は近代の主要な特性として考えられ、近代を貫くキートンとしてのコンテキストにとらわれない（コンテキストフリー）という特性の中に吸収されている。

このような個人主義の特性を意思決定の理論と対比させてみれば、意思決定論が個人主義の価値や態度を受け継いで理論化されていることは明らかであろう。個人主義の特性としての目的の確定と、合理的な目的手段体系の合成がそのまま意思決定論の中に取り込まれて意思決定の枠組みを構成している。意思決定論では実存的決断を取り扱うことはできないことは明らかである。意思決定論が一般的な意思決定の枠組みとしているのは、複数の代替案が成立している状況であり、個人主義の枠組みの中で意思決定がなされているとあってよい。意思決定論での意思決定の枠組みがすべての人間の決定行動を説明する一般性を持っているわけではなく、特定的人格類型を想定した前提が忍び込んでいるとあってよい。

古典的近代の欧米の個人主義が意思決定論に忍び込んでいることは、実存的決断を意思決定論の中から排除する結果をもたらしている。行

動科学の中に含まれている近代科学の条件であるコンテキストフリーという想定、つまり科学の対象として特別な存在を許さず、どの行為者も同一の条件で扱われ、個々の行為の差異は属性の差異によって説明されるという想定が存在する。これに対して実存的決断は自己という存在を特別なものとして扱うことから出発する判断であり、個別性に依拠して一般に解消されないところに「実存」の選択があるため、行動科学の枠組みでとらえることはできない。キャリア形成を行動科学の手法を用いて合理的な意思決定のプロセスとして理解しようとしても、実存的契機によって自己の存在の意味そのものを変革する過程を経由するならば、行動科学の還元主義に解消されない要因を含み込むことになり、これまでの理論では十分な説明はできない。

女性のキャリアを考えていく上で、女性は進学・就職・結婚といった外面経歴（濱口他「日本人にとってキャリアとは」日本経済新聞社1979で述べられている履歴書に書き込むような他者からみて明確に理解されるキャリア上の転換点をいう）に対して実存的判断を求められることが多い。これに対して、男性は外面経歴では実存的になる必要はないことは既に述べた。このような差異は、女性がキャリア上の展開を行うために社会的なサンクションを覚悟しなければならないことが多く、男性は既存のキャリアの枠組みから大きく逸脱することがない限りはサンクションはないことによるといえるだろう。つまり、女性が進学・就職などの外面経歴を経由する際に存在の様態そのものの変革を行うような大きな決定が行われなければならないことは、男性に許された社会への参入としてのキャリアコースが女性を排除してきたことの現れであるといつてよい。

実存的決断を理論に組み込むといっても、それほど大げさに考える必要はない。これまでの実存的判断は実存主義の影響で内的経験に対してのみ存在への問いかけの契機としての資格を考えてきた。しかし、現実には外面経験をきっかけとして自己の存在を考え直すことが普通であろうし、内面経験のみが実存的な判断の契機となるわけではない。むしろ社会科学の対象としてのキャリア形成が、人生を通して統一された目的遂行の一局面として行われていると仮定する行動科学や意思決定論によってのみ理解されることは適当ではないだろう。実存的契機をキャリア形成の中に取り込むことは理論的にも現実との対応から言っても必要な作業であると思われるが、そのことによって抽象的哲学的なレベルでの実存的決断を等身大の社会現象として理解すべきだろう。

つまり、実存的決断を行うことが人格的成長につながるのか、行動科学や意志決定におけるキャリア形成プロセスよりもより高度な決断であるかを主張しているわけではない。むしろ、日本の女性は外的経験を内的な経験として自己の内面の成長につなげることが不得手であり、他方日本の男性は実存的契機を喪失しているために自己の存在についての自省の機会を持ってないといってよい。このような意味では男性と女性が互いの存在の様態を交錯することなく産業社会の中で職業生活と家庭生活のそれぞれにおける存在の意味付与を行っている、あるいは自明のものとして受け入れているといってよい。近代の産業社会の枠組みの中で男性に与えられた自明の世界と、女性に与えられた自明の世界の構造がそれぞれ異なっているという事実をどのように確認するかというきっかけが失われていることについて本稿が指摘することは意味の

あることだろう。

さらに、近代産業社会がコンテクストフリーを基本線としていること自体を含めて、欧米の文化や価値志向と無縁ではないという事実を考えるならば、ハムレットは個人主義者ではないと主張すべきである。つまり、近代社会の理想的な男性像とは異なる価値志向が欧米の前近代に存在して、その中での作劇が現在のわれわれにまで影響を与えていることを考えるならばハムレットの悩みが近代産業社会に無視されたとしても、決して現在のわれわれの実存と無関係であるというわけではない。ハムレットの悩みが個人主義を前提としている行動科学や意思決定論の異質であるならば、われわれは新たなモデルを必要としているといってよい。

2. ローゼンクランツとギルデンストーンは死んだ。

ハムレットは結局決断をしていない。ハムレットはシェイクスピアの戯曲の中では、クロードィアス王に命じられて属領のイギリスにおもむく船の中で王の親書を読み、王が自分をイギリス王に殺害するように命じていることを知る。ハムレットは、自分の伴狂を確かめるためにクロードィアス王が呼び、イギリスまでの供を命じた自分の学友であるローゼンクランツとギルデンスターンの二人の殺害を命じるように親書を書き変える。ハムレットは船から逃れ、ローゼンクランツとギルデンストーンは何も知らずにイギリス王に復命し、命令通り殺害される。ハムレットは自らの存在が脅かされる状況になってはじめて行動を起こしているわけで、その点が優柔不断な人格像としてとらえられる要因の一つになっている。

存在そのものが脅かされる、つまり生命の危

機に直面することによって自己の存在の意味を問い直すきっかけとするケースは少なくない。自己の存在が危機に直面し、そのことを自省的に考える機会があるならば、自己の存在そのものの意味を問い直すことになることは自然だろう。死刑囚が自己の存在を問いなおし、存在そのものを見つめ直すことはよく知られているし、存在の危機を内的体験として文学や哲学としてそれを定位するケースは少なくない。大病や入獄などが存在の展開点になったという作家は少なくないし、このような経験がキャリア上の外面経歴の転換につながったことも少なくない。例えば、作家としては二流の才能の持ち主でしかなかったサンテクジュペリが、複葉機の操縦士としてなんととなく九死に一生という体験を持ったことで、自己の存在と直面し、それを文学として定位することによって魅力的な作品群、例えば「夜間飛行」や「人間の土地」などを著していることはその一例であろう。

存在と直面するという経験は、内的な経験であつてもよく、女性が妊娠し出産するという経験も、自分の中で新たな生命が誕生するプロセスであり、そのことで存在に直面するという意識を持つことも理解できる。むしろ、曲がりくねった木の根を見て存在そのものに思い至るのは極めて異常な感覚の持ち主であり、自分自身や身近な人の死に直面したり、あるいは誕生をきっかけとして自らの存在の意味を問い直すことが自然であるだろう。ハムレットは他律的に存在の危機状況に追い込まれ、そのことで行動を起こさざるを得なくなるが、行動のきっかけとしての存在の危機以前に父の死、母の再婚、父の亡霊の出現が重層して存在への問いかけがなされている。「このままでよいのか、このままではいけないのか。」

社会科学がハムレットの悩み（実存的決断）を扱う場合にもう一つの視点を考えなければならない。イギリスの戯曲家ストッパードに「ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ」という不条理劇がある（倉橋健訳「今日の英米演劇第五巻」白水社1968所収）。不条理劇と言っても、イヨネスコやベケットのようなアンチテアトロ（反演劇）ではなく、ハムレットのパロディであり、伝統的な演劇の様式に乗っ取っているが、ハムレットを主人公とするのではなく、脇役のローゼンクランツとギルデンスターンの立場から見るとシェイクスピアのハムレットは見事に不条理劇に転化させられる。

ローゼンクランツとギルデンスターンはクロードィアス王の要請でハムレットの様子を探るためにデンマークに招かれ、ハムレットとともにイギリス王のもとに派遣されることになる。この時にハムレットによってクロードィアス王のイギリス王への親書が書き換えられ、ローゼンクランツとギルデンスターンはイギリス王によって殺されることになる。つまり、ローゼンクランツとギルデンスターンの立場からはなんのいわれもなく死すべき運命へと導かれるプロセスであり、不条理の中に投げ込まれている。

ハムレットが主人公である限りにおいて、ローゼンクランツとギルデンスターンの二人はドラマツウルギー（作劇術）の必然として死ななければならない。ローゼンクランツとギルデンスターンは脇役として彼らの死によって演劇がクライマックスへと盛り上がるために死ぬ必然がある。仇役が死ななければならないのはドラマツウルギーの必然である。クロードィアスは兄を毒殺し、その妻を奪った。王妃ガードルードは殺害には関与しなかったが、毒殺者に王位と自らを与えた。それぞれに自らの選択の結果

としての運命を甘受しなければならないだけの理由がある。自分の自由な選択の結果として与えられた運命であるならば死という結果は観客にも自分自身に取っても受け入れられる結果である。しかし、ローゼンクランツとギルデンスターンの場合はこれとは異なる。

ストッパードの戯曲は、デンマークに招かれたローゼンクランツとギルデンスターンが船中の退屈のぎに二人で賭をしている場面から始まる。貨幣を投げ上げて表ならばローゼンクランツが勝ちで裏ならばギルデンスターンが取る。戯曲の冒頭でギルデンスターンが投げ、85回続けて表がでる場面から芝居は始まる。この世界、ローゼンクランツとギルデンスターンが生きている劇空間での世界はもはや偶然は働かないのであり、その象徴として確率に依存するゲームが成立しないことが暗示される。彼らはハムレットの実存的決断がいかなる方向に向かうかによってその運命が決定され、彼らの存在は必然の中に巻き取られ、自己の存在のあり方の自由な決断はおろか、偶然の働く余地もなく、ただ決定者の決断がどの方向に向かうかによって自分自身の運命的必然が分岐するのを待つしかない。

われわれの多くはローゼンクランツとギルデンスターンと同様の立場にあり、大状況の必然の中に巻き込まれて、自分の存在を自由に決定できる条件を失っている。キャリア形成において、自分を自分として形成していくことが可能であるような状況は、われわれが自明としている選択肢あるいは選択の対象としている以外の選択が不可能であるということからも明らかである。選択肢の中に含まれていないものを選択することはもちろん不可能である。しかし、自分が特定の存在を選び取れば、その中ではじめ

て選択肢として意識できる選択肢が現れ選択可能になる。意思決定論では存在を変えることなく選択肢を探索できるとするがこの場合には選択肢の範囲は探索の能力と努力・熱意に還元される。実存という概念と無縁な社会存在としての個人を想定した意思決定論や行動科学はむなしが、それだけの資質や能力を持つ人間しか実存に関与しないとされるのはさらにむなし。

キャリアを決定する要因が自分の資質と能力だけであるという社会が果たして幸せか。近代社会が社会的な機会をあらゆる職業や地位に開かれたものとしているという前提を成立させているために運命や偶然によるキャリア形成の展開を否定し、能力・資質のみがキャリアを決定する要件であるという原則に立つ。機会が完全に開かれたものであるならば、特定のキャリア形成に向かう努力や生得の資質によってキャリア上の成否は決定されることになり、それ以外の要素は公正さにもとるとされ、排除される。しかし、そのような原則に立つと、キャリアの失敗は自らの能力や努力の不足としてしか評価されず、キャリアの失敗を偶然に帰因させることはできない。必然性の中で生きるということは、偶然を排除し、起こり得る結果を受け入れることに他ならず、可能な結果がいかに惨めなものであってもそれを敢然と受け入れることが男らしい態度とされる。

努力や能力の不足を認めて、それを偶然の所産とすることを許さない社会は果たしてすみごちがよいのだろうか。日常の決定が実現しないのは、なんらかの偶然や運命によるものであると説明することでわれわれは自分の能力や努力の尊厳を救っている。自分が無能であるとか、努力が不足しているというラベルを付与されることを避けるためにはなんらかの説明の形式を

用意しなければならない。それが許されない社会はやはり居心地が悪いだろう。

自分の自由な決断の結果として明確に現れているものを受容することはやむを得ないとしても、ローゼンクランツとギルデンスターンのように決断抜きに突然不条理に巻き込まれ、生命の危機状況にさえ至ることがわれわれの日常にもあり得ないことではない。存在の危機に至らないまでも、選択肢が限定されることで存在のあり方が決定され、その中でしか生きることが許されないならば、存在にとっての危機であるといってよいだろう。決断することなく、他者の決定の客体としての存在でしかない状況に置かれていることをそれと意識していないこともありうる。

自己の存在を決定する主体が自己ではないという状況をこれまで社会科学では疎外と呼んできた。自己の存在のあり方を自分で決定できない状況は不条理であり、人間としての尊厳にもとると考え、その原因を資本主義の制度に求めたのがマルクスの理論であった。社会科学の領域で人間の尊厳の回復のための理論化が必要であるとすると、存在を選びとるための障害を明確にするという理論が求められることになる。しかし、障害は明確な実態であるとは限らず、深く潜在してその姿を見せない。ローゼンクランツとギルデンスターンの場合は、ハムレットの実存的決断が不条理の源泉であるといってもよいし、シェイクスピアのドラマツウルギーが源泉であるともいえる。われわれの多くは、現在の状況では自己の主体を侵害されている要因が不可視であり、条理ではとらえられない状態に置かれている。

すべての人間がハムレットになるとするならば、ローゼンクランツとギルデンスターンの役

割を誰が担うのだろうか。ハムレットの実存的決断はローゼンクランツとギルデンスターンという存在を必然とするのだろうか。1960年代の実存主義が実存的決断を行うことを金科玉条としてきたために、自由な判断の主体であることに極度に重視し、自己の置かれたコンテクストに関係なく判断できることが重要であると考えた。歴史性を無視したことによって、実存主義は無責任な放縦のための理屈としてみられるようになった。自分の実存的決断が他者にどのような影響を与えるかについて実存主義は問題としたが、それは没歴史的なその場限りの判断であり、持続する決断の主体が想定されている限りにおいて行動科学的な意思決定と連続するものであった。

どのような条件の時に人はハムレットになり実存的決断が可能になるのだろうか。自己の存在について自由な判断によって存在を選びとることができることは、少なくとも自己の尊厳を発揮する最低限の条件であるように思われるが、現在の社会では他の犠牲においてしかそれが可能でなくなっているのだろうか。シェイクスピアのハムレットは次のようなラストシーンを迎える。シェイクスピアの「ハムレット」も、ストッパードの「ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ」も結末は同一である。クロウディアス王、王妃ガードルード、ハムレットのいずれもが死んだ後で、ローゼンクランツとギルデンスターンを命令通り処刑したイギリス王の使者が到着する。

「ご命令どおり取りはからい、ローゼンクランツとギルデンスターンは死にました。お礼のおことば、どこからいただけるのでしょうか？(ストッパード1968 P.92)」

すでに主人公を失ってしまった空虚な舞台に

イギリス王の使節は問いかける。ハムレットの悲劇も、ローゼンクランツとギルデンスターンの茶番も結末は収斂する。しかし、その死の意味は、ハムレットの主体的な生と死と、ローゼンクランツ・ギルデンスターンの他律的な生と死が収斂したとってよいのだろうか。

われわれの日常がこのような不条理を内在していることをこれまで社会科学は認めようとしていなかった。条理での説明という形式を離れては科学の資格を疑われるという事実があるとしても、社会現象の理解を豊かにするためには不条理の介在を考える必要がある。この点はさ

らに、キャリアの形成という個人の決断の領域で濃密な不条理が存在することを意味する。人と人の偶然と必然が絡み合うことで人生が決まっていく。このプロセスを理解するためには不条理の存在が認められなければならない。

産業社会や組織社会のなかでの必然的大状況のなかで個人の主体を回復することはどのようにして可能であるのか。キャリア形成がそのなかでどのように行われていくか、ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ。彼らを死にいたらせしめたことを誰がほめてくれるのだろうか。